

バイエルン放送交響楽団

指揮: マリス・ヤンソンス



Jansons©PMeisel (BRSO)

オーケストラ・メンバーが語る ヤンソンス

柴田克彦 (音楽ジャーナリスト)

マーラー: 交響曲 第7番「夜の歌」、
ストラヴィンスキー: バレエ音楽「春の祭典」に寄せて

11月に日本公演を行うマリス・ヤンソンス指揮／バイエルン放送交響楽団は、今や世界最高クラスのコンビネーションを誇っている。そこで折しも来日中のメンバーに、同楽団の特徴や今回最注目目の演目、マーラーの交響曲第7番「夜の歌」などについて話を聞いた。

語ってくれるのは、「ハンブルク・フィルのコンサートマスターを経て、2009年からバイエルン放響で同職を務めている」アントン・バラコフスキー (以下B)、「ベルリン・フィルで11年間ヴァイオリンのトゥッチェ奏者を経験後、1997年から同楽団の首席ヴィオラ奏者を務めている」ヘルマン・メニングハウス (以下M)、「1995年から首席トランペット奏者を務めている」ハネス・ロイビン (以下L)の三人。いずれも要となるプレイヤーたちだ。

まず三人は口を揃えて、ヤンソンス(彼らは畏敬の念をこめながら『マエストロ・ヤンソンス』と呼んでいたのだが、以下敬称は省略)率いるバイエルン放響の素晴らしさを語る。

「世界有数のベスト・オーケストラです。特に人間性豊かなヤンソンスとのコンビネーションにおいては、これまでの人生の中で最高の音楽体験を味わっています。私たちの公演は、毎日が特別なコンサート。長旅などでどんなに疲れていても、一旦舞台上に上がれば全精力を投じて音楽に集中するのがこの楽団の特徴でもあります」(B)

「私はベルリン・フィルと比較できる立場にあるのですが、共に世界のトップクラスで、どのコンサートも最高レベルです。特にバイエルン放響に入ってから、もう少しうまくできたのではないかとの感覚を一度たりとも覚えたことがないほど、ベストな状態で演奏しています」(M)

「この楽団の素晴らしさは、楽員全員が常に向上を目指して

いること。入団して23年間いつもそれを感じています。ヤンソンスは奏者たちが互いに聴き合うことをモットーにし、コミュニケーションを大事にしています。彼は指揮者と楽員の心の結び付きなくしていい音楽はできないと考えていますし、私も彼の音楽的な結び付きを常に感じています」(L)

マーラーの交響曲第7番は、曲自体が特別な作品でもある。

「私はマーラーに会えたら質問をぶつけてみたい箇所が複数あり、ずっとその謎解きを繰り返しているような感覚をもっています。例えば、なぜテノール・ホルンを使っているのか？ 弦のリズムに叫ぶようなテノール・ホルンが重なるという、典型的な交響曲とは異なる方法で曲を始めた訳は？ マンドリンとギターを使う理由は？……など」(L)

「非常に複雑な楽曲ですが、感情はスコアから全部読み取れると感じています。この曲は、各楽器が全体のアコースティックのバランスを考えながら、同一の解釈で演奏して初めて成功するのではないかと思いますし、それは指揮者の力量にも関わってきますね」(M)

「私はこの作品自体が未来に向けた音楽ではないかと思っています。100年以上前に作られた曲ですが、研究していけばまだまだ色々な解釈が出てくる……。私自身は、第1楽章は戦争がテーマで始まると考えています。暴力的な力が少しずつ顔を出していき、第2楽章の夜の曲では愛情が現れる。そしていかに危険に晒され、暴力を受けようと終楽章では歓喜に変わる。だからこそ人間が存在し続けるのだ……といった壮大なドラマが含まれていると感じています」(B)

それをヤンソンスは見事に表現する。

「私はコンサートマスターとしてあらゆる質問をぶつけ、ディスカッションすることがあります。そのときヤンソンスは『マーラーが

作曲したときには、テーマのバランスなどの計算が完全に出来上がっていたと信じている』と話していました。彼は曲のあるべき姿が明確に頭に入っています。リハーサルでは、それぞれの楽器にどこが重要であるかを指摘します。さらに楽器ごとに弾かせ、それを全員が聴くことで皆に全体像を把握させます。またヤンソンスは私たちとのコンタクトを通して、これほど大きな楽曲をまるで室内楽のように感じさせてくれます」(B)

「我々はヤンソンスと共に様々なマーラー作品をやってきましたが、7番は彼の思い入れが特に強い楽曲です。ヤンソンスは、最終楽章のヒステリックなまでの強音が続く箇所でもオーケ全体の手綱を引き締めますし、ギターやマンドリンがどこに座ってどう音が聴こえるのがベストであるのかなど、すべてを研究し尽くしています。ですから強弱やクレッシェンド、アクセントなどを正確に把握した上で我々に伝えてくれます。またヤンソンスは音色を非常に大事にし、例えばカスターネットであっても、自分の考える色が出るまで徹底的に繰り返します。またマーラーの7番は色々なホールで演奏していますが、彼はまず客席に行って、どう聴こえるか、私たちの演奏が観客にどう伝わるかを確認しています。それに彼はヴァイオリンを学んでいたこともあって、自分が指示した通りのボウイングがなされているかどうかを最後尾の奏者にまで目配りし、休止の部分でも緊張感を保つために絶対に楽器を動かさないといった指示もされます。とにかく彼自身の努力が私たちの上を行っていると感じざるを得ませんし、それこそが偉大な指揮者たるゆえんでしょう」(M)

「私もやはりヤンソンスの頭の中でこの音楽のクリアなイメージができていのがわかります。しかし別の面もあります。以前『ツァラトゥストラはかく語りき』の公演が17回もありました。

こうなると最後の方は惰性になりがちですが、彼は常に新しいアイデアをもたらすことで、ワクワクするような気持ちや緊張感を保ち続けました」(L)

ちなみに、当コンビは10年前にもマーラーの7番を演奏しているが、「ヤンソンスは新しいアイデアをもち、新たに研究し、常に変化を求めていますから、当時と今は違います」(M)との由。かくして創造されるマーラーの7番への期待は限りなく大きい。

もう1つ、気になる演目がストラヴィンスキーの「春の祭典」(11/25(日)ミューザ川崎シンフォニーホール、11/27(火)サントリーホール)だ。「この技術的な難曲においても、ヤンソンスは映像的な想像を求め、それを描写することで絶妙な音色を生み出します。それに彼は、パーフェクトな演奏よりも情熱や感情を大切にしています」(B)

「この曲は指揮が難しいので、いかに自分のタクトが素晴らしいかを示したがる人がいますが、ヤンソンスはいかなる箇所でも音楽に身を委ねています」(M)

「『聴くのではなく私を見る!』という指揮者もいますね(笑)。ヤンソンスは全くその逆。とにかく聴くようにと言います」(B)

最後に全員が口を揃えて、日本公演への期待を語ってくれた。

「日本公演は毎回、オーケストラ全員にとって特別な喜びであり、楽しみでもあります。日本の国自体を皆が愛していますし、何より日本の方々ほど素晴らしい聴衆はいません」

三人の話の間くと、メンバーたちがヤンソンスを信頼し心からリスペクトしていることが、ひしひしと伝わって来る。この稀有にして最高のコンビネーションを、ぜひとも生で体感したい。



バイエルン放送交響楽団 指揮:マリス・ヤンソンス

2018年11月22日(木) 19:00(18:00ロビー開場) 東京芸術劇場 コンサートホール

歴史的な名演の予感! ◆マーラー: 交響曲 第7番 ホ短調「夜の歌」

S¥34,000 A¥28,000 B¥22,000(僅少) C売切 D売切

《お申込》 ジャパン・アーツぴあ 03-5774-3040

www.japanarts.co.jp

ジャパン・アーツ

検索

東京芸術劇場ボックスオフィス(0570)010-296

チケットぴあ t.pia.jp 0570-02-9999(Pコード:110-789)

イープラス eplus.jp ローソンチケット 0570-000-407(Lコード:31379)

主催: ジャパン・アーツ 提携: 東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団) 後援: ドイツ連邦共和国大使館

富士電機スーパーコンサート

マリス・ヤンソンス指揮/バイエルン放送交響楽団

11月23日(金・祝) 兵庫県立芸術文化センター

KOBELCO 大ホール

◆マーラー: 交響曲 第7番 ホ短調「夜の歌」

(お問合せ) 芸術文化センターチケットオフィス 0798-68-0255